

田村一男の眼差し -3-

田村一男（1904~97年）は、信州の山々に親しみ、日本の大地を愛した画家です。20歳を過ぎて訪れた蓼科高原の雄大な景色に魅せられ、生涯を通じて日本の高原風景を主題としてきました。とくに田村は、毎年のように信州を訪れ、信州の風景を題材にした作品を数多く残しています。こうした高原風景には、田村が自身の肌で感じた自然の厳しさと大地のぬくもりがそこはかとなく漂います。

今回の展示では、70年余りにわたる田村の画業を四つの年代に分け、それぞれの作風の特徴の解説を交えながらご紹介します。

また、展覧会「トリプルアタック！」（会期：2/13~4/3、会場：企画展示室）では、田村の代表作など約30点を展示いたします。そちらも合わせてご覧いただければ幸いです。



上左から 《父の像》（1938年）、《六月の丘》（1964年）
下左から 《五童》（1990年）、《春暁》（1974年）

